

刑務所目的の混乱について

——北米を中心に——

Muddled Goal of Prison — focused on North America

秋 山 薊 二

Keiji Akiyama

1. 序

刑務所囚人の矯正に関わる者にとって惹起を禁じ得ない問題の一つに、刑務所が一体何んの為に存在しているのか、と云うラディカルな問いがある。一般的に矯正と云う名目で刑務所は正当化されているが、実際は若い初犯の囚人が刑務所内で仲間を通し囚人化（犯罪者らしく教育される事）して行く何件かの例証を筆者は見ている。又筆者の囚人調査に於てもカナダ、ノバスコシア州全囚人の65%以上は再犯罪者であり、刑務所が社会の安全に貢献し、犯罪者を矯正しているとは考えられない（Akiyama, 1977）。このような矛盾は刑務所がその目標に一貫性を欠き、同時に刑務所存在目的自身が混乱を来している故であろうと考えられる。刑罰の基礎理論を探てみると、フォイエルバッハが確立したと云われる心理強制説、ビルクミアーの応報論、リストの目的刑論を挙げる事が出来る（莊子、大塚、平松、編、1972）。これらの基礎理論の背景にある理念はそれぞれ、脅威による抑止力、社会保護、及び報復である。本稿はこれらの刑罰の基礎理念に更正と云われる今日の理念を加え、現在北米刑務所運営目的として顕在的、潜在的に用いられているこれらの四つの理念と現実との間に横たわる矛盾と混乱を吟味する事を目的としている。更にこれらの矛盾と混乱を踏まえた上で、将来の刑務のありうべき方向を考察する。そこで先ず北米刑務所が如何に形成していったかその歴史的背景を探てみる必要がある。

2. 北米刑務所の歴史的背景

刑罰史の中で刑事犯罪者の取り扱いの主たる方法として刑務所監禁の実施に努力した18世紀のアメリカ、クウェイカー教徒は多くの歴史家から高い評価を受けている（Sommer,

本稿は筆者による “Survey of inmates perception of needs and attitude in Nova Scotia prisons-spring 1977” Master thesis, Dalhousie Univ., Canada の一部を改稿したものである。

1976)。

これ以前に於ては、有罪判決を受けた者に多種多様な残忍性に満ちた方法と道具に依る体罰、拷問が課せられていた。もし彼等が窃盗犯であれば手首を切り落すか、額に烙印を押し、虚偽を述べる者であれば舌を抜くか目を潰し、それ以外の犯罪者には鞭打か、公衆の面前に晒すと云う方法で対処した (Alper, 1973)。

事実、ローマ法や古代英国法に於て、監禁は有罪か無罪かその判別が不明瞭な者を拘留する方法としてのみ見做されていた (Nagel, 1973)。

監禁を刑罰として用いた最初は教会であった。それは初代教会が逃亡者、犯罪者等の庇護を許容していたと云う習慣に由来する。コンスタンチヌス帝時代の教会は宗教裁判にかけられる多くの僧侶、聖職者を出した。本来、教会は伝統的に殺戮を禁じており同時に苦痛を経験する事に依って純化されると云うキリスト教的命題を保持していたので、このような逸脱者に対する閑居、禁固が必然的に発展した。これは単に罰すると云う目的ばかりでなく、懺悔が最も起り易い状況を提供すると云う意図もあった (Nagel, 1973)。

その後、初代教会は牢獄、刑務所の前提となる、他の監禁拘束制度の創設に参画した。封建制度崩壊に伴ない社会不安が全ヨーロッパに広がり都市周辺の農奴(サーフ)は都市に移動し、浮浪者、無頼の徒と化し徒党を組み種々の犯罪を犯す様になった。都会はこれらの者に対する当時の厳しい体罰、拷問に代る方法としてワークハウス (Workhouse) の概念を導き出した (Nagel, 1973)。

16世紀の中期にロンドンに設立され、ブリッジウェルと命名されたワークハウスは、浮浪者、乞食、失業者等を強制的に収容し労働を強要した。その後このワークハウスは軽犯罪者の為にも利用される様になる (Sommer, 1976)。このワークハウスは極めて重要な二つの意義を保有していた。それは浮浪者、乞食、軽犯罪者を街から一掃する事であり、同時に彼らに労働する事の道徳的必要性を強制して教え込んだ事である。この故にワークハウスはヨーロッパ各地に建設される事になるが、当時行なわれていた、体罰、絞首刑、斬首刑に処する程でない多くの老若男女の軽犯罪者でまたたく間に一杯になってしまうのである (Nagel, 1973)。

18世紀から19世紀初頭にかけて教会以外の勢力が刑務所の発展に新しい刺激を序々に与え始めた。当時の残忍で苛酷な刑罰に対し一般大衆は反感と嫌悪の念を持っていたが、貧困の増大、経済不安の社会状況の中で序々に増幅されていった。この傾向は新しい科学調査の精神を持った改革運動と呼応する事になる。しかし実際面に於てはクウェィカー教徒により実行された宗教的考察と献身に依る所が大きい。1787年にはアメリカ、フィラデルフィアのクウェィカー教徒のグループが人道主義に啓発されその情熱を刑務機関構造の改革へと集中した (Sommer, 1976)。

この集団は「フィラデルフィア刑務所改革会」(The Philadelphia Society for Allviating the Miseries of Public Prison)として知られ、その後名称を「ペンシルバニア刑務所協会」(Pennsylvania Prison Society)と変更した。彼等は幾多の刑務所改革案を州立法府に提出し具体的改革を試みた。これらの改革案の中には囚人の男女分離、初犯者と重罪人との分離、刑務所内での酒類販売禁止などが含まれていた(Nagel, 1973)。1783年3月、英連邦最高議会(Supreme Executive Council of the Commonwealth)によって刑務所協会の改革案が認められ、ここに新しい刑務所⁽¹⁾(penitentiary—懲治監)の組織が生まれる事になった。立法府による最初の改革はフィラデルフィアにあるウォールナツ刑務所の維新であった。この維新とは重犯罪者で他囚人に悪影響を与えると思われる囚人を融離する独房を刑務内に設置した事であった。独房に監禁された囚人は自分の悪業を反省する為に聖書のみを持たされ終日一人にされ、食事を運ぶ看守を見る事が唯一の人間との接触であった。勿論一切の会話は禁じられていた(Sommer, 1976)。1829年に独房監禁はペンシルバニア州の正式な刑務所政策となった。この政策を実施する為にフィラデルフィアに東州立刑務所が建設された。この時に矯正と云う概念が刑罰政策の中に誕生したと云っても過言ではない。このフィラデルフィアシステムの要点は有罪犯を社会から隔離させて囚人相互のコミュニケーションを遮断する独房方式であった。クウェーカー教徒の独房監禁の理念は罰すると云う欲求に依るものでなく、寧ろ孫独は懺悔を惹起し、同時に囚人相互の悪影響を阻止する為の必要状況であると見做していた(Sommer, 1976)。

しかしながら、しばらくすると極度な疎外と孤独を強要するこのフィラデルフィア方式の囚人に与える心理的悪影響を懸念する者も出て来た。例えば、文豪チャールス・ディキンズはフィラデルフィアの東州立刑務所を訪問し、女囚、男囚、子供の区別なく強要されていた独房監禁に驚き、その印象を次の様に記述している。

「私はこの独房監禁は誤りであり、またその効果は余りにも残酷であると思う。この方式の意図する所が、善意と人間性を持った改革の精神に依拠している事は良く知っている。しかしこの改革を行なった人々は自分等が何を行なっているのか解かっているのではないかと私は思う。囚人に課せられたこの恐ろしい刑罰の熾烈な苦痛と苦悩の実情を評価出来る人は殆どいないのではないかとと思う。私は、この緩やかにして間断ない精神の惨めさと苦痛を用いての人間改造をいかなる体罰よりも悪しきものであると思う。」(Nagel, 1973, p. 9) <日本語訳筆者>

(1) 現在刑務所の英訳は Jail, Prison, Penitentiary などがあるが、1783年に初めて Penitentiary (懺悔所)と云う語が刑務所と同義語として用いられた。尚筆者は本稿中いづれも Penitentiary を刑務所と訳している。

確に、我々は捕獲された状況の中で自由を生きる為の人間の訓練など不可能なのである。それは恰かも、檻に入れた虎をクウェーカー教徒に改宗させ様と、何もせず手を拱いて待っているのに似ている。

ペンシルバニア方式が出現した数年後、今度はニューヨーク州がそれに代る新しい刑務所方式を導入する事になる。ニューヨーク州立オーバン刑務所に於ては夕刻以降囚人は独房監禁され他の囚人と融離されるが、日中は共同作業をする事によって他の囚人との接触が許容されたのである。このオーバン方式は施設の共同使用、囚人の労働力の利用と経済的利点が大きいため米国他州ばかりでなくカナダ、ヨーロッパ諸国へも急速に普及していった。このオーバン方式は現在までに序々に変化してきているが、この方式の中に包含されている重要な点は第一に監禁方法の使用に全く疑義を抱かなかった事であり、第二に休罰、刑罰を課すると云うより懺悔の期待に重点を置く事が定着した事である。この事は残忍な体罰主義からの脱皮、即ち改革の理念の真の勝利であったと云える(Nagel, 1973)。

3. 刑務所の目的

監禁、拘禁が犯罪者に課す法的制裁方法として用いられる様になって現在まで一世紀半以上経過したが、その更なる改善を目指しての批判は依然として継続している。Sommer (1976) は、フィラデルフィア方式もオーバン方式も共に囚人間の接触を回避すると云う点に於て大同小異であると怒りの念を表わしている。何孰れにせよ、一度この初期刑務所設立の理論的根拠が理解されると、その起源から現在の制度に至る分岐が明確になる。現在の刑務所に於ける監禁制度は、囚人と社会との接触を遮断し、囚人を犯罪者社会へ封じ込めてしまう事が主たる機能になっている。この事実は囚人の相互交友を防げる代りに複雑な犯罪社会の発展を助長しているのである(Sommer, 1976)。これが通常囚人の刑務所化と呼ばれているものである。この様な状況にある現在の刑務所は極めて改善しにくいものになっている。Nagel (1973) が記述する刑務所スタッフの適応状態に依って、それを確認する事が出来る。

「刑務所スタッフの多くは良い人々である。実際、私の長い経験を通して認識している彼等は囚人のニーズに答える様な刑務所に改善しようと情熱と意気込みを持って刑務の世界に入って来る。しかしその内の何人かは実用主義者か、悲観論者に変貌して行く。それは彼等が刑務所内部の制度を変えるのではなく、制度が彼等を変えてしまっている為である。」(Nagel, 1973, p. 10) <日本語訳筆者>

これらの現象の起因は幾多の理由が考えられる。しかし基本的問題点は社会自身が過去から現在に至るまで刑務所が何を成すべきか明瞭な回答を保持していない事である。それは刑務所自身が一つの方向に集中出来ず、その目的を混乱させる事になっている。現在の刑務所は刑罰を課する場所であり、同時に更生をも目指している。この様な相互矛盾を抱えた今日の刑務所を自己分裂の組織体と呼んでも決して過言ではないであろう。

さて、現在に至るまで監禁制度を正当化して来た顕在的、潜在的理念はいくつか存在している。刑務所の存在を正当化した第一の理由は“抑止 (deterrence)”である。この抑止の語源は“戦き (tremble)”, “恐怖 (terror)”であり、その語意は“嚇して近よらせない (frightens away from)”である (Sommer, 1976)。

ここに於て、刑務所監禁の脅威によって社会の成員が法律に抵触する事を阻止しようとする作用を持っていると推量出来る。この場合、抑止力は刑務所にすでに監禁された囚人よりも一般市民に密接な関わりを持つ事になる。自明であるが、この目的を完遂する為には、我々が犯罪を犯しても投獄に全く脅威を覚えない様な抑止力低下を防ぐ為に刑務所の生活環境を居心地良い物にする事は出来ない。しかしながら投獄の脅威が犯罪行為から囚人を抑止していると云う根拠は余りにも欠如している (Sommer, 1976)。事実、筆者のカナダ・ノバスコシア州刑務所囚人の実態調査によれば「二度と犯罪行為は起こさない」と確信する囚人は全囚人の約55%だけであり、残りの囚人は「必ず再犯を行なうであろう」、「再犯のチャンス五分五分」もしくは「状況に依るので解からない」などと回答している (Akiyama, 1977)。この様に投獄の脅威は犯罪者や刑務所囚人に対すると云うより、むしろ犯罪などには関係のない一般遵法者に対する抑止力と理解すべきである。

第二の理念は一般に良く知られた“微罰、もしくは報復 (retribution or vengeance)”である。その語意を辞書で調べてみると「返済として要求されるもの一特に罰 (Something demanded in repayment; especially punishment)」と定義されている (Morris, (ed), 1970)。実際、報復は社会が犯罪者の不法行為に対し刑罰の型態を用いてその返済を強要し、犯罪者は彼等の苦痛と忍耐を持って社会に支払っているのである⁽²⁾。奇異な事であるが、カナダに於ては1968年まで刑務所内での体罰(主に笞刑)が合法的に許されていた (Canadian Committee on Corrections, 1969)。現在、北米に於ては投獄監禁は極刑処置として裁判所の権限によって用いられている⁽³⁾。その軽重は刑務所の分類に依るばかりでなく監禁される期間の長短によって決定されている。犠牲者の復報微罰を肩代わりしている国家には、目には目、歯には歯、と云われる報復の象徴的同質性が基礎的要素として潜在してい

(2) 「償い」と云う理念もあるが、これは償う主体の意識によるもので第三者が「償い」を強要する事は「報復」である。故に、ここでは「償い」の論述は省略する。

(3) 北米では現在死刑は廃止もしくは停止されている。

ると考えられる。

心理学者である、Karl Menninger は報復の心理を次の様に描写している。

「危害に対して怒るのは当然の事である。又、すべての人間は、仕返しをしたいと云う満たされぬ願望を持っている。しかし、今日の我々の文明の中にあっては、仕返しなど公けに行なってはならない。個人的報復を我々は廃止した。だが、法制化された公的報復を我々はまだ楽しむ事が出来る。一度、誰かが有罪の判決を受け、犯罪者のレッテルを貼られると、社会のルールを破ったのだから微罰を受けるのは当然であると云う信念の様な感覚が我々の中に生まれる。」(Menninger, 1968, p. 190) <日本語訳筆者>

公的報復刑罰としての刑務所監禁には看過出来ない問題がある。それは、一度社会に対して罪の負債を返済したならば、過去は一切清算されるであろうと信ずる犯罪者に対してである。何故なら、罪に対して負債を返済した以上彼には汚名を着る事なく、新しい人生を出発する権利を持って当然である。しかしながら、現実には前科者としての法的、社会的差別、市民としての権利の喪失、又刑事機関による度重なる嫌がらせ等、が彼等の上に課せられる事になる。更に、公的報復刑罰は、一般市民の正義感を満足させ、人々の犯罪者に対するサディステックで攻撃的衝動を助長している事である。又この報復の理念は単に犯罪者の刑罰にのみ焦点が当てられ、犠牲者を完全に無視しているのである。

第三の刑務所の目的理念は社会保護である。この目的は恐らく最も多用される刑務所目的の一つであろう。刑務所は確に法律を破った者の束縛施設としてこの目的を果している。社会保護と云う視点に立って刑務所を理解すると、刑務所は限定された場所に犯罪者を幽閉して彼等の更なる違法行為の発生を防ぐ為の物理的拘束機関と見る事が出来る。確に現在の刑務所はこの機能を充分果している事に疑いの余地はない。しかしそれは飽くまでも監禁中の囚人に限って言えばの事である。すでに論述したが、投獄の刑罰的脅威が、他の違法行為を行なう可能性のある者に対して抑止力として作用しているかどうか極めて疑わしい。だが、犯罪者が刑務所に監禁されている間は、全囚人の社会的犯罪行為の発生とその可能性が停止している事は事実である。この事実にも拘らず犯罪発生率は年々増加しているのである(Statistic Canada, 1972)。すなわち、刑務所が社会保護の為に機能していると証明出来る客観的材料はほぼ存在しないのである。

第四の刑務所目的の理念は、今日の刑務界の主流である犯罪者の更正(Rehabilitation)である。この刑務所目的は、北アメリカ、ヨーロッパ諸国の刑務機関によって近年頃に受け入れられて来ている。更正の語意は「教育もしくは治療によって有意義な人生を回復す

る事」(Morris, (ed.), 1970, 日本語訳筆者)もしくは「再適応させる事, 以前の状況を回復する事, 復帰する事」(Sommer, 1976, p. 23) <日本語訳筆者>である。しかし一般的に云って, 刑務界に於ての「更生」と云う用語は余り意味を成していないのが現実である。何故なら生活の困窮, 誘惑, 敵意に満ちた社会環境の中へ出所して行く囚人に対して社会は殆ど何も行なっていないからである。むしろそれが結果的に再犯を誘引していると考えられる。更に, 刑務所監禁の現実には以前の状況に復帰させる事とは全く関係のない事である。すべての刑務所目的の中で恐らく更生が最も曖昧な理念であろう。その理由の第一は, 普遍的に許容される更生の定義が存在しない事, 第二に, 更生とはその対象者が治療者, 教師, 看守等の価値観, 感情を共有すると云う前提に立っている事である (Nagel, 1973)。

カナダ・オンタリオ州矯正局は更生の概念を次の様に述べている。

「刑務所に収容されている人々が, 社会の中で個人的, 社会的適応に成功する様なより良い機会を与える為に治療, 訓練を施し人間修正を試みる事である。」 (Ministry of Correctional Service, 1974) <日本語訳筆者>

この故に, 個人カウンセリング, グループカウンセリング, ビヘイビヤーマディフィケーション, 刑務所内通貨の発行, 等が更生理念の具体策として, 刑務所内で近年順に実施され発展を続けている。しかしながら, 刑務所目的の優先項目は, その効果に関係なく, 矢張り社会を保護する事である。更生の概念を標榜したオンタリオ州矯正局は同じ報告書の中で次の様に述べている。

「裁判所によって矯正局に課せられた法的義務は社会保護の遂行である。」 (Ministry of Correctional Service, 1974) <日本語訳筆者>

すなわち, 刑務界の当事者が刑務所目的と囚人の取り扱いに関し本音と建て前を使い分けている事が解る。この様に, 今日の刑務所の基本的問題点は上述した種々の目的理念概念が相互に矛盾もしくは葛藤している事である。Hawkins (1976) はこの点を次の様に明快に述べている。

刑務当事者の矯正処遇に対する不満は異なった基本的理念に由来する。それが, 彼等をして矯正処遇のあるべき姿を誤解させているのである。矯正処遇が個人の権利や尊厳を無視しているのでなく, 頑なに陳腐な刑罰理念からの感覚的出発に依っているか

らである。従って矯正処遇方法の指導に問題があるのである。(Hawkins, 1976, p.12)

＜日本語訳筆者＞

更に刑務所監禁により生ずる一般的効果は一般社会と相反する種々の価値、規範、態度等が囚人達によって入所者へ導入される事である。この影響が、囚人をして一般社会人と全く異なる自我同一性（所謂、囚人の準文化、刑務所化）を持つ原因である。この故に、たとえ普遍的要素を臨床的処遇に用い様としても極めて困難な状態に直面しなければならない (Sutherland & Gressy, 1970)。

この様な状況下にある囚人は一方で、矯正に携わる人々に依る、更正、再社会化を志向する多様な処遇を通して一般社会に適合した、価値、規範、態度に直面しなければならない。この様な刑務所環境の中で、囚人が人格、自我同一性、価値観等の不協和を経験しているであろうと充分推測出来る。

数年前に矯正当事者と刑務所囚人の間の“更生”概念に関する調査が行なわれ一つの発見があった。それは刑務所囚人にとって“更生”と云う概念は「出所する事」、「稼ぎが良くなる事」、「良い家に住む事」であり、一方刑務所で更生指導する人々にとっての“更生”概念は「責任感を身につける事」、「社会認識を持つ事」、「自己信頼の感覚を持つ事」、「社会的適応力を備える事」などであった。この事実を踏まえて、調査を行なった Shihadeh と Need (1973) は刑務所囚人と矯正当事者の相互関係は相容れない二つの準文化構成の中で行なわれていると示唆している。

更に、1945年以来行なわれた囚人の矯正効果に関する 231 件の調査結果を丹念に吟味した Mertinson (1974) は、二、三の例外を除いて、更正努力が囚人の再犯防止に有効であったと評価出来るものは全く見あたらないと陳述している。以上の如く、更生と云う言葉は刑務所目的の中で現在最も期待され許容されているにも拘らず、その実体は極めて貧しいものであると云わざるを得ないのである。

3. 帰 結

結局、刑務所存在とその機能に関する問題点は、その目的、政策に一貫性を欠くと同時に相互矛盾をも包含している事である。この事実は更に、刑務所囚人の更生処遇効果の大きな負因になっているのである。しかし一方では幾多の組織、グループに依って、刑務所の最も効果的方向と内実ある目的の探究努力が続けられている事は確である。今、その萌芽があちらこちらで見られる。カナダ矯正委員会は将来の刑務所のありうべき目的を次の様に纏めている。

刑務所は孤立した存在としてでなく社会共同体の一部として見做すべきである。刑務所全体としての目的は次の様なものでなければならない。

- 1) 刑務所で刑期を務める各囚人を赦免と仮出所の対象として束縛する事。
- 2) 法を守り、社会に貢献する市民としての永続的社会復帰の為に各囚人にその準備をさせる事。(Canadian Committee on Corrections, 1969)

短絡すれば、刑務の目的は刑務所と社会が統合する事であり、又遵法市民として囚人を再社会化させる為に各刑務所が一つの方向に向って協調する事である。これらの基礎に立って、アメリカ、カナダの一部でハーフウェイハウス⁽⁴⁾(Halfway House)が試験的に運営されている。このハーフウェイハウスは刑務所囚人が刑務所の塀を越えて、社会の真只中で社会復帰の準備を行なうもので、18世紀から19世紀にかけての囚人管理方法が体罰から監禁に改革されたと同様に、正に画期的なものである。すでに論述したが、相互に矛盾し一貫性を欠く複数の目的を刑務所が保持する事は“更生”の負因となる。一つの目的を完遂する為に刑務所は全努力を集中すべきである。その目的こそ「更生」であるべきである。ハーフウェイハウスの運営はこの当然の帰結であると云っても過言ではない。

しかし、“更生”の目的完遂に大きな問題が横たわっている。それは犯罪者、前科者に冷淡で排他的な社会そのものである。“更生”とは主体(囚人)と客体(社会)との協調によって初めて成り立つものであって、排他的環境の中であって主体の更生など無意味である。この点に気附いた Else と Stepherson (1974) は、犯罪が起る様な個人的、一般的環境を造り出したのは社会自身であり、犯罪者にその負債を支払わせるのは誤りで、社会こそが犯罪者に負債を支払わなければならないと論述している。出所する囚人を受け入れる社会にこの様な自覚こそ必要である。

“更生”とは社会の中であって初めて意味を持つ概念である。更に、もし“更生”が真に成功するならば、当然社会自身の安全も確保されるのである。以上を総合すると、刑務所の目的は只一つ、犯罪者の“更生”に絞るべきであり、又社会からの遊離を廃止して社会と犯罪者が互に協力しつつ社会の安全を確立すべきである。そこで、矯正当事者の様々な処遇方法の努力が具体的に試練され結実するであろう。今後の刑務所は社会と遊離する事なく、社会と協調を取りつつ、社会の只中で“更生”目的完遂に向けて着実に自己改革を続けていかなければならないのである。

(4) ハーフウェイハウスとは市街地に存在する寮の様な型式をとった囚人管理方法で昼は自由に街へ出て仕事、学校などへ通う事が出来る。夜間の門限、その他若干の規則は課せられる。

参 考 文 献

- AKIYAMA, K. (1977) "Survey of inmates' perceptions of needs and attitude in Nova Scotia prisons-spring 1977" Master thesis, Dalhousie University, Canada.
- ALPER, S. B. (1974) *Prison Inside-Out: Alternatives in Correctional Reform*. Cambridge, Mass.: Ballinger Publishing.
- THE CANADIAN COMMITTEE ON CORRECTIONS (1969) *Toward Unity: Criminal Justice and Corrections*. Ottawa: Queen's Printer.
- ELSE, F. E. and STEPHERSON, D. K. (1974) "Vicarious expiation: A theory of prison and social reform." *Crime and Delinquency*, October.
- HAWKINS, G. (1976) *The Prison-Policy and Practice*. Chicago: The University of Chicago Press.
- MENNINGER, K. (1968) *The Crime of Punishment*. New York: The Viking Press.
- MERTINSON, R. (1974) "What works-question and answers about prison reform." *The Public Interest*, Spring: pp 22—54.
- MINISTRY OF THE CORRECTIONAL SERVICES (1974) *Ontario Annual Report of the Minister for the Year Ending 31 st March 1974*. Toronto: Ministry of Correctional Services.
- MORRIS, E. (ed) (1970) *The American Heritage Dictionary of the English Language*. New York: American Heritage Publishing Co..
- NAGEL, W. G. (1973) *The New Red Barn: A Critical Look at the Modern American Prison*. New York: Walker and Company.
- SHIHADDEH, S. E. and NEED, N. A. (1973) "Inmate evaluation of a penitentiary incentive programs." *Canadian Journal of Criminology and Corrections*, 15/2: pp. 229—238.
- SOMMER, R. (1976) *The End of Imprisonment*. New York: Oxford Press.
- STATISTIC CANADA (1972) *Statistics of Criminal and Other Offences*. Ottawa: The Ministry of Industry, Trade, and Commerce.
- SUTHERLAND, H. E. and CRESSY, R. D. (1970) *Criminology*. Philadelphia: J. B. Lippincott Co., Inc..
- 莊子, 大塚, 平松 (編) (1972) *刑罰の理論と現実*. 東京: 岩波書店

(1978. 11. 6. 受付)